

“学ぶ”は“まねる”、“習う”は“慣れる”

“まなぶ(学ぶ)”という言葉は、昔は“まねぶ”と言いました。それは、“まね(真似)る”と同じ意味の言葉です。

幼児は、見るもの聞くもの、すべてを模倣し、模倣することによって、経験を身につけ、これを能力化していきます。そして、言葉話す能力は、二歳から三歳にかけて著しく伸びますが、この時期の幼児は、人の話す言葉を実に無造作にまねて、それを巧みに使います。“まね”がいつの間にか“ほんもの”になっています。まさに、“学ぶ”とは“まねる”ことです。

ですから、教育学者が“模倣期”と名づけているこの時期の言語環境の良し悪しは、その子の言語能力を決定します。したがって、テレビやラジオから流れる音も、幼児たちはすっかり吸収しているのですから、聞かせたほうがいいのか、聞かせないほうがいいのか、聞かせるとしたら、どんな番組にスイッチを入れるか、というむずかしい問題も当然出てきます。

学習の“学”が“まねる”なら、“習(なら)う”は“慣(な)れる”ことです。“慣れる”の古い形は“慣^なる”で、“ならう”はその変化したものです。

物事をくり返しくり返し、聞いたり、見たり、したりして慣れるのが、“なら(習)う”ことです。ですから、“学習”とは、まずお手本の“まね”

をして、そのまねたことを反復して“慣れる”ことです。“まねる”こととそれを“くり返す”こととで、子どもの能力は育つのです。

しかも、幼児は同じことの“くり返し”が大好きです。おとなにはばからしく思える“くり返し”が、幼児にはおもしろくてたまらないのです。この性質があるために、幼児は、何でも楽しんで身につけることができます。

物語でも、同じ物語を何回でも聞きたがります。同じ話では飽きるだろうなどと考えるのは、おとなの誤った思いやりです。そんな誤った思いやりから、次々と新しい物語をしてやったのでは、言葉が身につかず、しかも、集中力のない、飽きっぽい性質の子どもにしてしまいます。

急速に物が豊かになった現在では、いわゆる愛情過多から、おもちゃなども次々と新しい物を与え過ぎる傾向があります。その結果、“くり返しを好む”という、発育上欠くことのできない重大な性格をこわしています。幼児は、くり返しが好きな模倣期には、能力が伸びますが、くり返しをばからしく思うようになりますと、途端に伸びが衰えてきます。時期がきて、くり返しのおもしろさを感じなくなるのは自然ですが、親の誤った愛情から、どこまで伸びるか測り知れない幼児の能力を抑えてしまうことは非常に執念です。